

教育だより

サツマイモの来た道

三芳伝来二六〇年をたどる

今年、三芳地域サツマイモ伝来二六〇年にあたり、「富の川越いも」としてブランド化され、全国的にも評価が高い農産物。三芳地域にサツマイモがどのように伝来したのか、そして、どんな努力によって特産化してきたのか、その歴史をダイジェストで紹介しします。

ルーツは中南米

一万年前から食糧に！
サツマイモの原産地は中南米メキシコからベルー。紀元前八千〜一万年前の遺跡から炭化したものが発見され、古くから食料にされていたことが判った。その後、紀元前三千年頃には中南米一帯に広まったようで、その頃のインディオの遺跡から、サツマイモを模倣した土器も多く発掘されている。

世界に船出

三ルートを通り世界へ
中南米から世界中に広がるきっかけは、一四九二年、コロンブスが新大陸を発見したことによる。新大陸発見は様々な恩恵をヨーロッパにもたらすが、栽培食糧の



上富のサツマイモ畑は日本一長い！

サツマイモ作り始め二六〇年

南永井村 吉田弥右衛門
三芳付近でのサツマイモの作付開始は、昆陽が作付成功後、僅か十六年後の寛延四年（一七五二）。南永井村（三芳町隣接、現所沢市）の名主吉田弥右衛門による。



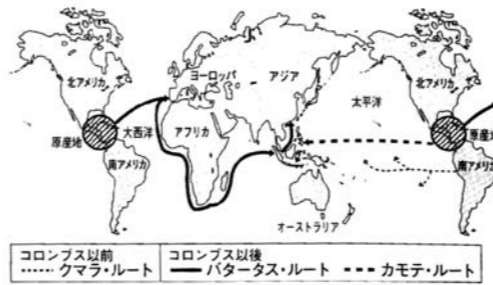
「昆陽神社」(千葉市幕張地区)

吉田家に残された『覚書聞書覚帳』に「さつまいも作り始めの事」として「寛延四年二月二十八日江戸木町河内屋八郎衛門殿世話にて、ご公儀の許しを得、上総国志い津村（現市原市）の長十郎方へ弥左衛門を遣わし種芋二百個を買求めた」とある。購入のための路銀、購入費用はかなり要したが、近隣の村々にも分けられ、武蔵野の台地帯の新田村の飢えを救っていた。

吉田弥右衛門、弥左衛門親子の英断なしには、三芳付近のサツマイモの特産化はあり得なかった。吉田家始作二五五年の平成十八年十一月二十三日、功績を称え、関東のサツマイモ作りの元祖である甘藷先生と合わせて『甘藷乃神(いものかみ)』として祀られた。

東洋に到着

中国・琉球(沖縄)へ
一五九三年に中国へ。中国ではサツマイモを朱薯といひ、救荒作物として珍重された。
琉球(沖縄)は、日本本土、中国、東南アジアを繋ぐ海洋交易国。進貢船の総管として琉球と中国を往来していた野國総管は、この朱薯の入手に奔走。一六〇五年、野國総管は奔走の末、中国の福建から朱薯の琉球持ちかえりに成功。野國総管から作付方法を聞いた



サツマイモの呼び名と世界への伝播図
「芋地藏巡礼」国書刊行会より出典



「芋之神の社」
(三富新田内・神明神社境内)

江戸時代後期、早や特産品に

近來畑方第一の作品
文化十五年（一八一八）、風流歌人独笑庵立義は紀行文「川越松山巡覧図誌」で、三富のサツマイモを「富のいも」として味の良さを褒め称えている。この頃、すでに江戸で「富のいも」として、評判であったことが判る。さらに、天保二年（一八七二）

儀間村地頭儀間眞常は、生涯をかけて琉球に広めていった。天災の多い琉球では、サツマイモは大いに重用、琉球本島のみならず、周辺の島々にも伝播していった。

日本各地へ伝播

救荒作物として飢饉を救う
琉球(沖縄)にサツマイモが伝播して七年後の一六二二年には、琉球国王が九州薩摩国(鹿児島県)に種子島を通して献上。十年後の一六一五年には長崎に伝わる。やがて西日本各地に伝播するが、享保十七年(一七三二)に西日本を中心に一万二千人の餓死者を出した「享保の大飢饉」前後には急速に広がる。サツマイモは飢饉から多くの人々を救った。

九州では、サツマイモを「唐芋」というが、「孝行芋」とも呼ばれる。親孝行な子どもたちと同じくらいにありがたいという意味である。また、伝えた人に感謝した逸話が多く残る。

瀬戸内海の島々にサツマイモを伝えた下見吉十郎は「芋地藏」として祀られている。享保の大飢饉では、松山藩で三五〇〇人の餓死者があったにもかかわらず、瀬戸の島々では餓死者ゼロであった。世界遺産石見銀山のある石見地方(島根県)では、代官井戸平佐衛門正明を祀る「井戸神社」が各

いる。江戸の終わり、早や特産品としての評判は定着したようだ。

近代になってからの努力

赤沢仁兵衛・山田いち
サツマイモ特産化の努力は明治時代になってからも続く。

明治初期、福原村(現川越市)の赤沢仁兵衛は、作付畝を高くすることで、収量の倍増に成功した。このことは、仁兵衛自身が『赤沢式高畝法』として書物にまとめ、全国に普及させていった。なお、仁兵衛は、その高畝法を確かなものにするための実験地として特産地三芳の畑で試作もしている。

さらに明治三十三年、突然異変種からサツマイモの女王と今でも愛称されるベニアカを発見普及したのが木崎村(現さいたま市)の山田いちである。ベニアカは、皮の赤身の美しさと実がきれいな黄色、ホクホク感と品の良い甘さから、サツマイモの女王と呼ばれ、昭和初期には関東東の九〇%の畑



芋代官 井戸平左衛門は「井戸神社」に祀られる

青木昆陽が栽培を進言

飢饉への備えとして
西日本を襲った享保の大飢饉は、関東にも備えの必要性を教えてくれた。享保二十年(一七三五)、青木昆陽は幕府に「蕃薯考」を著し、救荒作物としてサツマイモの栽培奨励を進言。八代將軍の許しがでて、馬加村(千葉市幕張)や不動堂村(九十九里町)で試作し成功。その後、関東各地に急速にサツマイモは広まっていった。昆陽もまた、後世、馬加村に昆陽神社が建立され、祀られている。

を埋め尽くした。
こうした中、同じベニアカでも三芳町上富のベニアカはホクホク感、味と共に比類なきとされ、天下に勝るサツマなしと評判であった。開拓地の耕作土を、農業者たちが努力を重ねサツマイモに適した畑に改良してきた成果といえよう。

町立歴史民俗資料館では 企画展 サツマイモの来た道

三芳伝来二六〇年をたどる
十月一日〜十二月十八日まで開催します。是非、見学にいらしてください。
歴史民俗資料館
〒(0158) 66555

十月十五日(日)には「世界一のいも掘り大会」を開催します！詳しくはホームページをご覧ください。

「大きいよ、思わずにっこり」
サツマイモ掘り体験より

